

現代の就職活動を勝ち抜き、さらには社会で活躍するための
企業に選ばれ、社会で飛翔するための次世代キャリア戦略～

今、なぜ学生が自身の サステナビリティストーリーを 持つべきなのか？

それは、社会と企業の構造的変化、そして個人のキャリア形成に
おいて、サステナビリティが無視できない
「共通言語」かつ「評価軸」になったからです。

私のサステナビリティ・ストーリー

武蔵野大学 3 年

私が発展 FS を通して最も強く感じたことは、サステナビリティとは特別な活動ではなく、「人と人が向き合い、問いを重ねるプロセス」そのものだけということである。授業開始当初、SDGs は正直なところ抽象的にしか理解しておらず、自分の将来や日常生活とどこか距離のある概念だと感じていた。しかし、学生やニッセイエプロの方々と実際に対話し、企業の現場に触れる中でその認識は大きく変化した。

社員や社長へのインタビューでは、SDGs 関連だけでは無く就職についての質問、根本的な問いを投げかけた。学生という立場だからこそ率直にできた質問に対し、社員の方々が真剣に答えてくださった姿が印象に残っている。そこには、SDGs を単なる企業としての目標ではなく、自分たちの働き方や価値観と結びつけようとする姿勢があった。

また、社員アンケートの作成を通じてサステナビリティは環境対策や社会貢献だけで完結するものではなく、社員一人ひとりの納得感やウェルビーイングと深く関係している。その視点は、これまでの授業では得られなかった大きな学びだった。

エコプロでの共同出展では、自分たちの活動を来場者に説明する役割を担った。最初は SDGs をどう伝えればよいかわからず、ファーストコンタクトのとり方もままならなかったが、「学生が企業と一緒に考えてきたプロセス」を伝えることで、多くの人が興味を示してくれた。この出展で私は、サステナビリティは正解を説明することではなく、共に考えるきっかけをつくることなのだ実感した。

発展 FS を通して、私自身のサステナビリティストーリーは、「問い続ける姿勢を持ち続けること」だと考えるようになった。社会に出た後も、目の前の効率や成果だけにとらわれず、「この仕事は誰を幸せにしているのか」「自分は何に納得して働いているのか」を問い続け、その積み重ねこそが持続可能な社会と自分自身のキャリアの両方を支える基盤になると感じている。

発展 FS 最終課題

武蔵野大学 経営学部 経営学科

これまで私にとって、SDGs やサステナビリティは、重要性は理解しているものの、どこか抽象的で実感にくい概念でした。環境問題や社会課題として語られる場面は多くありましたが、それらは「社会全体が取り組むべきもの」という認識にとどまり、自分自身の行動や価値観と強く結びついているとは言えませんでした。アメリカなどの国に留学している友人から、早い段階で SDGs 教育に触れてきたという話を聞いたこともあります。また、日本に来て大学受験の過程でも SDGs は頻繁に取り上げられていました。しかし、その多くは制度や目標の理解が中心であり、「自分はどのように関わるのか」「何を問い続けるべきなのか」まで深く考える機会は限られていたように思います。

私がサステナビリティを初めて「自分ごと」として捉えられたのは、大学1年次の FS でした。SDGs と消費をテーマに、立川のごみ処理施設を見学し、環境配慮型商品を扱う店舗を訪れました。さらに、蜜蝋ラップ制作のワークショップや、ラジオを通じた情報発信にも取り組みました。これらの経験を通じて、サステナビリティは知識として理解するものではなく、行動や発信を通じて社会とつながるものだと実感しました。

一方で、その後の日常生活において、同様の実感を継続的に得ることは容易ではありませんでした。授業の中でサステナビリティに触れる機会はあっても、テーマとして切り取られることが多く、自分の立場や将来像と結びつけて考えることは少なかったように感じます。

そのため、サステナビリティは再び「特別な場で扱われるもの」という認識に戻ってしまいました。

今回の FS は、そうした私の認識を大きく変える経験でした。学生という立場で企業の方々と直接対話し、課題や価値観について意見を交わす中で、「問いを立てること」そのものが、サステナビリティにおいて重要な役割を果たすことに気づいたからです。

学生の率直な問いは、必ずしも即答を求めるものではなく、企業や組織が自らの在り方を見つめ直す契機になっているように感じられました。特に印象的だったのは、正解のある課題よりも、答えを探し続ける必要のある問いが、対話の質を高め、相互理解を深めていた点です。その過程を通じて、サステナビリティは「義務として取り組むもの」ではなく、組織や個人が自らの価値観を再確認し、持続的な行動につなげていくための枠組みであると捉えるようになりました。

今回の FS を通して、私の中でサステナビリティは、外部から与えられた目標を達成することよりも、内省と対話を通じて行動の質を高めていくプロセスに重きがあるものへと変化しました。環境配慮や社会貢献は目的ではなく、その結果として生まれるものであると考えるようになりました。

私にとっての「自分だけのサステナビリティストーリー」とは、特定の成果を示す物語ではありません。問いを持ち続け、自身の立場や行動を見直し続ける姿勢そのものです。今回の FS は、その姿勢を具体的な経験として自覚させてくれた、非常に意義のある学びの機会でした。

今後も、社会課題を「遠い問題」として捉えるのではなく、自分自身の選択や関わり方と結びつけながら考え続けていきたいと思っています。それが、現時点における私なりのサステナビリティへの向き合い方です。

自分ごとから始まるサステナビリティ

人間科学部人間科学科 3 年

第一章：義務になっていた SDGs との出会い

本発展 FS では、企業の方々や学生同士の対話を通して、サステナビリティについて考えてきた。最終的にはエコプロに出展し、自分たちの学びを来場者に伝える経験もした。本レポートでは、その中で私自身の考えがどのように変化したのかを述べる。

私はこの授業を受けるまで、SDGs に強い関心を持っていなかった。高校時代、毎月のように同じ SDGs 啓発ビデオを繰り返し見せられていたり、黒板には SDGs のロゴのポスターが常に貼られていたりしたが、それは学びというより、義務として処理する作業になっていた。どれほど大切な内容であっても、課題として与えられることで興味は薄れ、形だけのものになり、次第に自分の意思で考える対象ではなくなっていった。

第二章：「もう古い」といわれる理由への気づき

しかし授業を通して、SDGs が「もう古い」「ブームは終わった」といわれる理由を考えるようになった。それは、問題があまりにも大きく、自分ごととして捉えられていないからであると考えた。

第三章：Well-being という新しい入口

そこで私は、Well-being という考え方に可能性を感じた。Well-being は自分の幸福や健康、家族や身近な人の幸せに焦点を当てるため、より具体的な目標である。私は、人は本来、利己的で短期的であり、「今の自分が困らなければ動かない」存在であると考えている。しかし、環境問題や人権問題が自分の将来を侵すものだと理解したとき、人は初めて行動する。だから私は、自分→Well-being→SDGs という流れが、サステナビリティを広げるための現実的な入口であり、緩衝材になると考えた。

第四章：エコプロで突き付けられた現実

エコプロでの出展では、自分の考えを大学生から社会人まで幅広い人に伝える機会を得た。共感してくれる人も多く、学びを広められたという達成感があった。一方で、「学生の意見だから」、「学生と社会人じゃ違うからね」と年齢や立場だけで否定される場面もあり、私はとても悔しかった。自分の考えが内容ではなく、属性で評価されてしまう現実を知り、それを覆すためには、感情だけではなく知識と根拠を持つことが必要なのだと痛感した。

第五章：私のサステナビリティストーリー

この経験を通して、私のサステナビリティストーリーは、どれだけ多くの物事を自分ごととして捉えられるかにかかっていると確信した。多様な立場に立って考える力、そしてそれを言葉として伝える力を身につけることで、初めて大きな問題と現実的につながる。SDGs を単なる流行語で終わらせないために、私はこれからも自分の Well-being を出発点に、知識を蓄えながら、身近な一歩を積み重ねていきたいと考える。

自分を知ることから始まるサステナビリティ / 武蔵野大学 経営学部経営学科

これまで私は、サステナビリティや SDGs を「社会全体の大きな課題」や「企業や行政が取り組むもの」として捉えていた。しかし発展 FS の授業を通して、SDGs は働きやすさや生活のしやすさにもつながる、誰にでも身近なテーマであることに気づいた。日々の学びや対話を重ねる中で、サステナビリティは特別な行動ではなく、私たち一人ひとりの価値観や日常の選択の中に存在しているものだと感じるようになった。

授業やエコプロでの振り返りを通して特に印象に残っているのは、「問いを立てること」の大切さである。正解を急いで求めるのではなく、「なぜそう思うのか」「自分は何を大切にしているのか」と問い続けることで、他者への理解だけでなく、自分自身への理解も深まっていった。このプロセスを通して、私は初めて自分自身と向き合い、自分を知ることができたと感じている。

また、学生という立場だからこそ持てる素直な疑問や視点には大きな価値があることも学んだ。社会の中で当たり前とされている働き方や仕組みに対して問いを投げかけることは、働きやすさや生きやすさを考える第一歩である。そのような学生ならではの視点を大切に、失わずに持ち続けていくことが重要だと感じた。

エコプロやニッセイエプロの方々と話す機会は、私にとってとても貴重な経験になった。異なる価値観や世代の人と対話する中で、意見の違いは対立ではなく、新たな気づきを生み出すきっかけになることを実感した。変化の激しい社会の中では、一つの正解に固執するのではなく、状況に応じて考え方を更新し、他者と関わりながら進んでいく姿勢が求められると考える。その中で私は、硬くなりすぎず、変化を受け止めながら前に進める、しなやかに生きていける人間でありたいと考えるようになった。

発展 FS を通して、サステナビリティとは社会課題を解決するための概念であると同時に、自分自身の内面を見つめ、他者とともにより良い未来をつくっていくための土台であると学んだ。今後も学生としての視点を大切にしながら、自分を知り続け、対話を重ね、しなやかに生きる姿勢を実践していきたい。それが、私にとっての「自分だけのサステナビリティ・ストーリー」だと思う。

発展 FS 最終課題レポート

「自分だけのサステナビリティーストーリー」

経営学部経営学科

「サステナビリティ」という言葉を聞いたとき、正直なところ、自分とは少し距離のある概念だと感じていた。環境問題や SDGs は大切だとは思っているものの、ニュースや企業の取り組みとして語られることが多く、日常生活とどう結びついているのかを深く考えたことはなかった。しかし、今回の発展 FS での学びや経験を重ねる中で、サステナビリティは特別な行動ではなく、日々の選択の積み重ねなのではないかと考えるようになった。

今回の FS を通して、今までにない経験ができて、とても貴重な機会になった。社員の方や社長へのインタビューに加えて、特にエコプロでは、自分がこの活動を通して何をやってきたのか、そして何を考えてきたのかを、自分の言葉で伝える場面が多くあった。これまでの私は、用意された答えをなぞるように発表したり、正解らしいことを言おうとしたりすることが多かった。しかし、自分の3つのハッシュタグを考えたり、エコプロでは、正解よりも「自分はどう感じたのか」「なぜそう思ったのか」を問われ、自分自身と向き合う必要があった。実際に来場者と話す中で、同じ取り組みについて説明していても、相手によって関心を持つポイントや受け取り方が大きく異なることを知った。また、実際に自分が他のブースを回って、アプローチの掛け方を見て学んだり、人との対話におけるポイントについても実践的に学んだ経験から、サステナビリティは一方的に伝えるものではなく、相手との対話を通して初めて意味を持つものだと感じた。また、自分の言葉で説明しようとすることで、自分自身がこの活動をどう捉えているのかも、以前より明確になったと感じる。

自分の経験や考えを言葉にし、相手に伝えられることは、就職活動や社会に出た後にも必要とされる力だと思う。企業に選ばれるためだけでなく、自分自身がどんな社会人でありたいのかを考える視点として、サステナビリティは重要な軸になると感じた。これから先、就職活動が始まるので今回の FS で学んだことを活かし、自分の価値観や行動を振り返りながら、社会との関わり方を考え続けていきたい。自分の言葉で語る「サステナビリティーストーリー」を持つことが、私なりの今後のキャリア形成につながると感じている。

—私の人生のサステナビリティ・ストーリー—

発展 FS を受ける前

発展 FS を受ける前、SDGs を学んだ時は大学一年生の時であり中学、高校生頃はテストの対策として単語を覚える程度であった。大学でも意識はあまりしてなく、私のサステナビリティ・ストーリーは SDGs という単語と内容がある程度知るだけで終わると思っていた。

発展 FS を受けているとき

私が発展 FS を受けた理由は、将来の夢が決まっていなく何かアクションをおこさないと感じ、大学の外に出て何か学ぼうと思ったからである。その時も正直、SDGs は意識しておらず、授業で SDGs について本格的に学ぶときはとても不安であった。授業を受けるにつれて、“SDGs は流行りで終わる”という内容に納得してしまい、流行りで終わらせないためにどうすべきかのディスカッションでも、私はあまり意見を言うことができなかった。そんな中、そういう意識や不安が変わった出来事がある。それはエコプロに出展した時だ。エコプロでは環境について考える仕事をしている方や、自発的にエコプロに参加した同年代の学生の意見や意識を聞いて、SDGs は流行りで終わってはいけないのだなとより一層感じ、若者世代がもっと SDGs を意識していかないといけないと感じました。エコプロに参加したことにより私のサステナビリティ・ストーリーは良い方向に変わったと思いました。

発展 FS を受けた後

発展 FS を受けたことはとても良い経験だった。SDGs はもちろん、最近ではウェルビーイングも流行ってきているので意識しながら生活していきたい。またそれ以外でも社長とのインタビューや仲間とのディスカッションを通してたくさん成長できたと思う。この経験を糧に就活やその後の生活に活かしていきたい。

私は発展 FS の授業を通して、普通の学生では得られない経験をたくさんすることができたと思っています。授業をする前は自分がサステナビリティ学科に所属していて SDGs という言葉に目が引き授業に参加しましたが、SDGs 以外にも経営戦略、PDCA リサイクルなど自分が知らなかった知識や知恵を学ぶことができ、毎回授業に参加することがとても楽しかったです。

始まった当初はみんな知らない人ばかりで緊張しましたが最後の頃には仲良くなれたと思っています。また伊関さんが急に問いを投げかけてくることが多々あり、瞬時に対応する能力が自分は乏しかったのですが、伊関さんのおかげで少しは良くなったと思います。最近の大学の授業では問いを投げかけてくることはほぼなく、パソコンをいじることばかりなので、授業がとても新鮮に感じました。

自分が特に印象に残っているのはニッセイエプロの社員や社長さんとのインタビューです。学生にとって実際に社会働いている方と話す機会はなく、とても印象に残っています。その中でも特に印象に残っているのはインタビューです。

インタビューはとても楽しく有意義な時間を過ごすことができたと思っています。自分は学チカについて質問したら、そんな重く考えることじゃないと言ってくださり、少し考えが変わりました。自分が就きたい職業に短期でバイトしてみることや、今やっているバイトを学チカにすればいいなど、自分は学チカのためになにかしようと思っていましたがその考えはやめ、自分がしたいことを学チカにしよう思いました。自分はまだ2年生ですけど将来のことを考えるととても良い機会になったと思っています。

また、エコプロへの出展を通じて、さまざまな立場の人と直接話す機会を得られたことも大きな学びだと思っています。来場者の年齢や関心は多様であり、同じ「サステナビリティ」、「SDGs」というテーマであっても、捉え方や価値観が人それぞれ異なることを実感しました。自分は二日間参加し、初日はうまく話すことはできませんでしたが二日目は一日目の反省を生かし上手く対話することができたと思っています。お話が好きなおじさんの対応は難しかったですけど、それも良い経験だと思っています。その中で、自分たちの取り組みを相手に分かりやすく伝える難しさと同時に、対話を通じて新たな気づきを得る面白さも感じました。この経験は、今後社会に出た際に必要となるコミュニケーション能力の基礎を養うものだったと考えています。約4か月間のことをまとめ改めて発展 FS の授業を受けて良かったなと思い、またこの学びを無駄にせず今後の就活や人生に活かしていきたいと思います。短い間でしたがお世話になりました。

— Beyond SDGs：冷めた社会を熱くする「内なる成長」のサステナビリティ・ストーリー／

第一幕：止まった時計と、見えない壁

会場を埋め尽くす色とりどりのバッジ。しかし、その裏側には「SDGs 疲れ」という冷たい空気が流れています。

「リソースがない」「余裕がない」「うちは関係ない」。

多くの中小企業経営者のポケットには、長年使い古された『やらないための言い訳リスト』が詰まっています。SDGs は、いつの間にか「誰かに言われてやる、つまらない宿題」になってしまいました。

でも、本当はみんな気づいています。

このまま「効率」と「コスト」だけを追い求めて、自分たちの会社は、社員の心は10年後も笑っているだろうか？

今の「冷め期」は、社会が「外側の目標」に疲れ、「自分たちは何のために働いているのか」という内側の空虚さに直面している証拠なのです。

第二幕：魔法ではない「テコ」の正体

そんな冷めた空気を切り裂くのは、豪華なコンサルタントの提案でも、多額の投資でもありません。

それは、「まだ何者でもない学生」という、純粋で無垢な『問い』です。

彼らは「なぜ、この会社はあるのですか？」「その仕事は、誰を幸せにしますか？」と、大人が忘れてしまった本質を、真っ直ぐにぶつけてきます。

この瞬間、会社の「支点」が動きます。

これが私たちの提唱する「カタリスト型レバレッジ戦略」です。学生という『触媒（カタリスト）』が、経営者の心に眠っていた情熱に火をつけ、社員の中に「共感・目的意識・レジリエンス」という内面的な成長（IDGs：Inner Development Goals）を呼び起こします。

第三幕：Beyond SDGs：『義務』が『ウェルビーイング』に変わる日

私たちが目指す「Beyond SDGs」の世界では、SDGs は「目的」ではなく「結果」に変わります。

学生との対話を通じて、組織のガバナンスが透明になり、誰もが本音で話せる「心理的安全性」が生まれたとき、会社は単なる仕事場ではなく、「自分が自分でいられる居場所（ウェルビーイング）」へと進化します。

「負の遺産を残さない（SDGs）」という消極的な守りから、「働くことで、関わる人すべてを幸せにする（Well-being）」という積極的な攻めへ。

データは証明しています。ウェルビーイングの高い組織は、そうでない組織に比べて、イノベーションもレジリエンスも、そしてビジネスパフォーマンスも劇的に向上することを。

第四幕：2025年、ある条件が揃う時

2025年。社会のルールは劇的に変わります。サステナビリティの開示義務化（SSBJ基準）、グリーンウォッシュへの厳罰、万博が掲げる「持続可能な調達コード」。

「適当にやってきた企業」が、見えない壁にぶつかり、立ち往生する時が来ます。

その時、迷える多くの企業にとって、私たちの歩みは「唯一の希望」となります。

「ああ、あの時ニッセイエプロが言っていたことは、こういうことだったのか。学生と向き合い、自分たちの内面を見つめ直すことが、実は最強の生存戦略だったんだ」と。

結び：希望のレシピを、すべての人へ

国連（UNGC）が認めた私たちの Impact Story は、単なる表彰状ではありません。

リソースのない中小企業が、「若者との対話」というテコを使って、いかにして自分たちの幸せと社会の未来を同時に創り出せるかを示した「希望のレシピ」です。

エコプロで蒔いた種は、今、冷たい土の下で根を張っています。

「SDGs はブームだったのか？」

いいえ、ここからが本番です。

「やらされる SDGs」を卒業し、「満たされる Well-being」へ。

共に、未来の危機に負けない、しなやかで温かい「心のインフラ」を創っていきましょう。